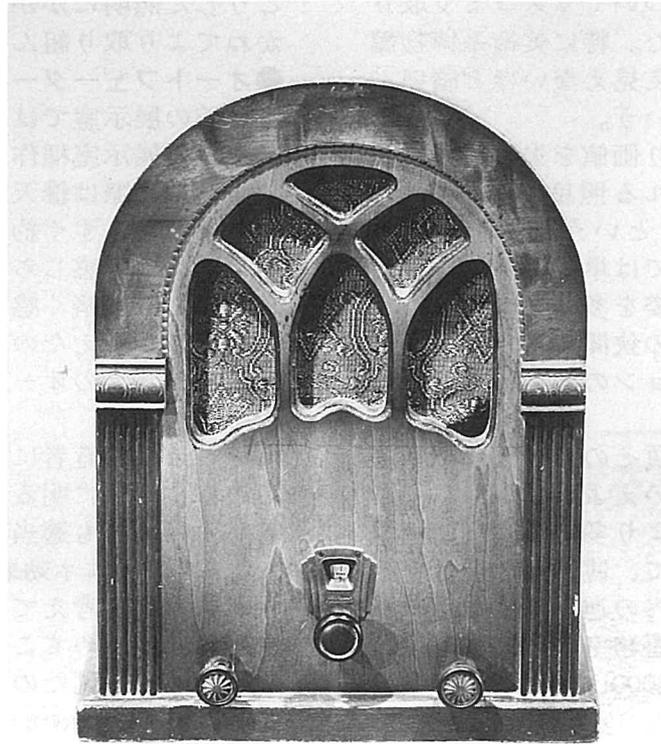




# 民俗博物館だより

Vol. 26 No. 3

2000. 3. 31



▲ラジオ（高取町越智 辻本イトエ氏寄贈・当館蔵）  
〔7月9日まで展示中〕

## 目 次

データベース事始め回	
退色防止用仮設型オートフェーダーの 省エネ効果実験について……………	1
資料紹介 春日藤……………	3
民俗資料の聞き書き短信回	
宇陀郡榛原町山辺三・戒場の伝承……………	5
普及講座 「茶の民俗」実施して……………	6
お知らせ……………	7

## 退色防止用仮設型オートフェーダーの省エネ効果実験について

大宮 守人

### ●はじめに

博物館展示室の、照明による退色防止策にかかわる展示の暗さについてマスコミで取り沙汰されたことがあった。特に美術系博物館では展示室が人の顔さえ見えないほど暗い、との苦情が出ているという。

水彩画など退色により価値を失う作品、史資料の展示に求められる照度が50～70lx (ICOMの推奨は50lx) という展示が定着するなか、各地の博物館では単眼鏡と懐中電灯持参の熱心な観覧者の姿を多く見かけられるようになった。保存と公開の狭間で編み出された博物館巡りのファッションの趣さえ感じさせる。

明るさは情報の量と質そのものとして重要な現代的要素であるといえよう。

明るい照明によってより多くの生産や情報が扱われる現代にあって、博物館の展示室の照明が暗いのは、時代への逆行と映ったにちがいない。ちなみに、事務室の照明は500lx、細かい作業場の照明は1000lxを越える時代にあっては尚更のことだろう。

しかし、博物館の展示資料保全の側面からは、ICOM (イコム：国際博物館会議、ユネスコ傘下の国際・非政府機構) の推奨は50lxというのからも察せられるとおり、不要な光はできるだけ避けるのがよいことになる。各館の重要史資料、作品等の貸し出し期間が1ヶ月以内とされ、かつ公開時の照明も低照度に押さえられるのは、照明等による退色劣化防止のためなのである。

当民俗博物館も展示室を持ち、特別展などでは絵図・地図など美術的、歴史的な価値を

有する品々を庶民のくらしの変遷に関わる史資料として借用展示する場合も多い。従って、こうした照明にかかわる資料の劣化対策にはかねてより取り組んできたところである。

### ●オートフェーダーの活用

当館の展示室では、入口ロビーから壁一枚越えると展示室稲作コーナーとなっている。ロビーの窓際は曇天時でさえ1200lxの明るさで、そこからすぐ約200lxの展示室に入るため一様に暗く感じられる。仮に1000lxの照明を採用しても暗く感じられるのである。

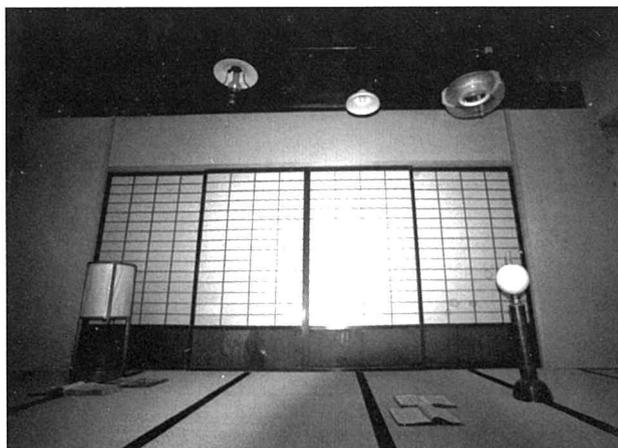
そこで、考えたのが明るさへの競合からの脱却策としてのオートフェーダーの活用である。

それは、観覧者に先に暗さを見ていただくから、徐々に明るくするという方式である。資料の保存上も適当な明るさに慣れていただくという省エネ効果をも兼ねたオートフェーダーの利用を考えてみた。

筆者がはじめてこの類の装置を展示照明に応用した例を見たのは、「たばこと塩の博物館」〔(財)たばこ総合研究センター立S.53.11.3開館〕の特別展示室のウォールケース内での浮世絵等に対する蛍光灯の調光であった。

それはケースのガラス越しに観覧者が近づくと、床面に複数埋め込まれたフットスイッチによって徐々に点・消灯するようになり、退色防止効果とあわせて、発熱防止効果も得られそうで印象深い展示用照明装置であった。

蛍光灯での自動調光は、制御動作が点灯時と消灯時で異なり、装置の製作に費用がかか



1. 昔のあかり体験コーナー



2. コーナー設置例 (60w×5個の白熱球に制御電流を供給)

るためかあまり普及していないようである。この点当館の装置は白熱球用で制御も単純であるのだが、どういうわけかこちらも展示用としてはあまり普及をみていない。

当館では染織資料や絵画資料等の退色防止用として、平成4年度の特別テーマ展「龍蛇のまつり・伝説」以来必要により使用してきた。

観覧者が感知された時だけオートフェーダーを作動させることで、不必要な光線照射をなくし、展示照明や熱による劣化を最小限に抑さえようとした。展示ケース内では電球は60wの白熱球1個または、40w 2個を2m以上離してオートフェーダーに接続した。対人センサーとして、市販の焦熱型熱線センサー付自動スイッチ（玄関脇の壁などへの埋込防雨型）を採用し、それにサイリスタチョップとタイマー回路等による電流自動制御回路を増設してアルミケースに入れたものを製作した。展示室天井のライティングダクトを元電源とし、制御電流は対象照明器具を接続した別系統の仮設ライティングダクトに供給する。

装置を5～8m程度の感知距離で対象エリアの奥側に設置し、観覧者の動きをレンズ角度を調整したセンサーが感知、スイッチングにより電流制御回路が作動、プリセットした立ち上げ時間で給電され徐々に点灯する。また感知範囲外に観覧者が出ると徐々に消灯する。この市販のセンサーは人の動きを感知する毎に消灯タイマーをリセットし、切れ目なく点灯させる回路が内蔵され大変有効である。消灯信号発生までの時間と、感知感度の設定は対人センサー側で行い、消・点灯動作時間の設定は増設した電力制御回路で行っている。自然な作動にはこれらの設定に注意が必要である。

### ●省エネの効果

今回100Wクールビーム球45個余りをこの方法で制御対象とした結果、1日に32.76kw×単価23円÷753円×306日÷23万円（当館計

算例）という年間節減額が算出できた。各コーナーの1日の合計点灯時間を1時間として算出したが、小学校の団体利用が多く、1日5～6校として1学校の館内滞留時間を30分～1時間程度、各展示コーナー滞留時間は10分程度と見ているが、個人利用の観覧者が長蛇の列を組むような利用形態ではこの節減形態はあてはまらないことになる。しかし、さらに重要な点は、電球に徐々に電流を送るため、フィラメントへの突入電流がなく電球の寿命が著しく延伸されることである。観覧者以外の館職員の通行も多い展示室廊下側の小コーナーの例では、60Wのレフ球5個を使って5年間切れないという実績を見ている。通常は半年に1個の消費である点が大変興味深い。

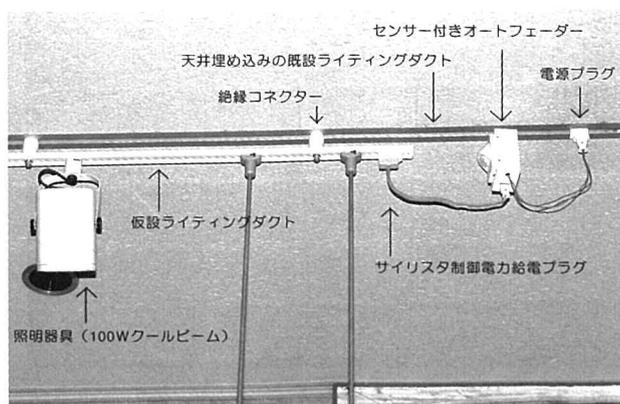
### ●おわりに

今と昔の暮らしの違いの一つに、照明の明るさがあげられる。行灯（あんどん）、ランプ、白熱電球、蛍光灯と家内の照明具の発達とともにその光量が増し、その下ではより細かい多くの文字が読まれ書かれるようになった。その違いは、当館の常設展示「昔のあかり体験コーナー」で確かめることができる。

当館でのこの装置の開発は、真っ暗なコーナーでの小さな明かりの展示「昔のあかり体験コーナー」（奈良県置県100年記念「明治・大正・昭和 생활資料展」S.62.5.21～S.63.6.30、H.10.4.1より復活展示中）を新設の際、昔のあかりを再現するなかで、明るさとは何かを考えたのがきっかけであった。不要を前提にモノを見れば古い生活用具はなにも語らないが、目的をもってモノに近づけば様々な物語があるものだという事を如実に表す例であろう。過去のモノからも何が芽生えるかわからない。われわれの社会が必要から生み出した文物＝知恵の結晶について多様に、また体系的に蓄積することを不動の姿勢で保ち続け、多様な実物を通して見いだす冷静な眼力を鍛えることは大変意義深いことと思われる。有限な地球環境に生きるにはよほどの知恵が必要なことから。



3. 天井への設置例 (左右に各1個それぞれ100W×6個を制御)



4. 機器配置例 (右側本体から左側照明器具に制御給電)

## 春日藤

横山浩子

当館が所蔵する資料の中に『織物集覧』という書籍がある。明治35年東京高等工業学校染織科教授高力直寛他により編集された教材用の織物標本で、150種余の全国の織物見本布を貼付する。

そのうち奈良県（大和国）の織物として、大和緋、奈良晒、綿蚊帳とならんで「春日藤織」が挙げられている。貼付されている布は8.0cm×5.6cmの小片で、産地を「奈良」と付す以外この布の由来などについてのコメントはない。経は藍と白（4:2）の縞だてとした五越組、糸の材質は経緯とも手績みの麻の撚り糸である（写真1、図1）。

## ●文献にみえる「春日藤」

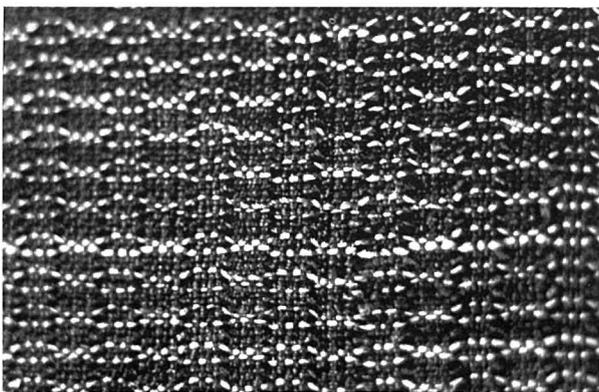
『奈良市史 通史三』（昭和63）第二章「奈良町の産業」で近世の奈良晒についての概説が述べられているその末尾近く「文化14年（1817）椿井町の与一郎が麻糸と絹糸を使って考案した「春日藤」があるが、専売権をもらい一家の業にとどまった」（p.144）という一文が以前より気にかかっていた。いったいどんな織物なのだろう？

「春日藤」といっても現在は地元でも一般に知る人は殆どいない。しかし試みに手元にあった染織関係の辞典類を引いてみるとその名をみつけることができるものもあって、例えば『増補染織辞典』（昭和9年 日本織物

新聞社発行、昭和49年はくおう社より復刻）では、「かすがとうふ（春日藤布） 麻織物の一。又春日藤（とう）とも略称す。奈良附近の山地より産出す。元藤皮より採れる糸を使用せしが、現在は苧麻の手紡糸を用ひ、五越組等に織る。縞物生地物あり。幅九寸五分、長さ六丈、着尺以外夏帯・夏襟地等にも用ふ。」とある。一方、昭和52年に発行された『原色染織大辞典』（淡交社発行）のその項目には「奈良県吉野郡の山地に産した。ふじこぎ・ふじぎものなどという」と記され、これは「藤布」という字面からきた誤解であり、確かにかつて奥吉野地域にそういう藤織りの伝承はあったが、以下に述べる春日藤（布）の系譜とは全く別のものである<sup>註1</sup>。

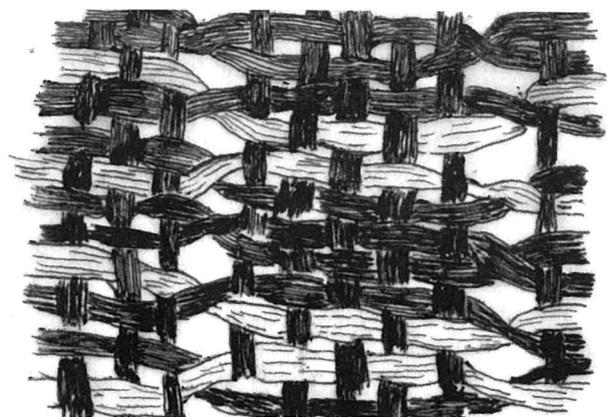
この春日藤（布）について、先頃上記『奈良市史』の執筆者でもある木村博一先生より、明治17年12月農商務省工務局発行の『工務局月報』第32号がこの布について知りうる最も詳しい記述である旨ご教示いただいた。

それによると、文化14年椿井町の松本與一郎（屋号は粕屋）が発明した織物で、奈良奉行川井越前守久徳（任期1815～1818）のお褒めのあったこと。松本氏は翌年生布組合組頭をへて新規専業を願出、大仲買相談の上10年間これを許された。文政10年改めて永年専業を願い10年の専売を許され、天保4年には奈良奉行梶野土佐守良材（任期1831～1836）も



←→ タテ糸の方向

▲写真1 『織物集覧』に貼付された春日藤



←→ タテ糸の方向

▲図1 同左織組織

これを賞美し、のち「御免春日藤布新縞緞織頭」として永久に専売権を得たこと、などその由来が記されている。ちなみに説明の冒頭に括弧書きで（白地 柳條 絹入 紋緞）とあるのでそういう色々な趣向のものがあつたらしい。

また奈良県立図書館『藤田文庫』所収「奈良左良志布・蚊帳・襖地」（藤田庄二郎著）中には「…（前略）其後惣年寄西城戸町住清水浪江巧ヲ傳ヘテ製ス春日藤ハ最上ノ苧糸ヲ経トシ、絹糸ヲ緯トシ織タルモノニシテ價モ高シ。明治12、3年頃東城戸町増田仁兵衛筆墨行商ニ伊賀ノ上野ニ出張セシカ伊賀ニモ春日藤ヲ知ル人アリテ春日藤ハ今尚奈良ニテ製スルヤト問フ一軒製スル家アリト答ヘハ是非買受タシト依頼セラレ清水方ニテ買求メ送ル一反金七圓ナリ當時ノ米二石ノ價ニ相當ス云々春日藤布ハ最上ノ上布ナリトヲ知ルベシ明治25年清水浪江逝去此巧ヲ傳ヘシ者ナケレハ廃絶ス。」とその後の消長を伝える一文が載せられている。

### ●「春日藤」の遺品

こうして文献からその概要を知ることはできたが、実際これがどのような布なのか、ということについては想像の域を出るものではなく、この『織物集覧』の小布をみてはじめてこういうものか、と納得がいったのである。



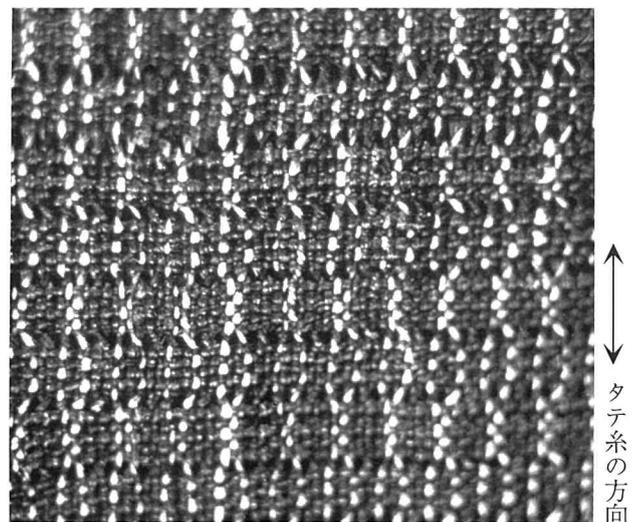
▲写真2 奈良晒保存会所蔵の春日藤布着物

しかし同時に、私が「春日藤（布）」をみたのは実はこの『織物集覧』の布がはじめてではないことに気づいた。以前月ヶ瀬村の奈良晒保存会所蔵の資料の中にこれと同じ布で仕立てられた着物をみた記憶があつたのである。素材は麻だが、平織りの布類に混じって1点だけ緞の組織で織られていたということでこの着物は印象に残った。どこで織られた布なのだろう、自家製か、購入か？しかし、寄贈者が同村石打の殿木戸千代さんという方であるという他、その時点では入手経路など詳しいことはわからなかった。

当時生平布を主眼において調査していたこともあるが、うかつにも「春日藤（布）」という名は私の中には浮かばなかったし、もしそのとき可能性として考えたとしても確証を得るべき材料をその時点では持ち合わせていなかった。『織物集覧』の布を基準資料として得たのち、改めて拝見させていただき、両者が同種のものであること、つまり奈良晒保存会の所蔵資料の中に「春日藤（布）」の希少な遺品があることを確認し得たのであった（写真2、3）。

なお、「春日藤（布）」の名称の由来であるが、奈良、とその名を聞けば誰もがまず思い浮かべるほど縁の深い春日社と、その象徴である藤にちなんだ命名であろうと、私は素直に考えている。

註）奥吉野地域の藤織りの伝承については『大塔村史』（1959年）『十津川』（1961年）『吉野の民俗誌』（林宏著 文化出版局発行1980年）等に報告されているので参照されたい。



▲写真3 同左（部分）

# 宇陀郡榛原町山辺三・戒場の伝承

## 1. 山辺三の盆行事

## 2. 山辺三・戒場のサビラケ（田植始め）

浦西 勉

### 1 山辺三の盆行事

この村は、ほとんど（85軒）が大念仏宗（融通念仏宗）である。西方寺という寺の檀家である。西方寺の寺伝によれば、天正9年（1581）宗祐寺開基宗祐の弟子宗仙によって創建、本尊阿弥陀如来、客仏薬師如来立像。

打越千代氏（大正9年生）に尋ねた、この村の盆行事について記す。

8月1日から7日まで、「とうまいり」といい、墓参りをする。「とうまいり」とは、石塔に参ることで、西方寺にある石塔に参る。盆を初めて迎える家は、アラタナを作る。アラタナは13日の朝、桧の葉と青竹によって作られるやかたのこと。家の縁側にて青竹をやかたにし、藤の蔓でとめて、そこに桧の葉で葺く。13日の夕方、といっても3時頃から（ヒルネアガリという）、ムカイトイマツといって、ムギワラを青竹に差して作ったものを、家に近い道の両側に立てて焼く。

新ボトケ以外のホトケ、古い先祖は13日の夕方に同じく迎えに行き、座敷の仏壇の前に机を準備して位牌をのせて祀る。その前に、ハスの葉（盆の時、花屋さんにて売っている）に、農作物のキュウリ・ナス・カキ・イナホ・ウリを供え、花などもオミナエシ・キキョウを供える。タイマツで先祖を迎えると、ウル米の粉で作ったオチツキダンゴを供える（新ボトケも同様）。先祖さんを迎えてから、オチャトということは何回も行う。ムエンボトケは外に祀る。家のヤカゲが多い。竹のカゴをうつぶせにし、ハスの葉を敷き、その上に供え物を置く。

14日は白粥を炊いて、ツケモノ・ミソを柿の葉の上に供える。柿葉は両端を切って、その上に白粥とツケモンをのせて供える。箸は麻の木である。春のタネマキは麻ガラ、早くまくとゲンが良いという。麻は青い木を水につけ皮を腐らせて芯を箸にした。

昼はごはん七草のオシタシ

七草のオシタシとはヒエ・ユリ・ソバ・ダイコンバ・アカザ・ナンキン・マメで、それらも柿の葉にのせて供える。オチャは常に行う。ソーメンをゆがいて、かわらけに供えた。その間、オモチ（白ムシ、セイロで蒸す）を作る。これは、白ムシを球形にして麻の木を中心に立てて13個作る。ムエンさん用のもので、ムエンさんに供える。

夕食は、小豆（ササゲ）のオハギを作る。オカズはタゼ、アカザの入ったオツユ、アカザは畑にはえている。オハギをオカズにして、オチャトをする。14日は、お寺の僧侶が経を読みまわってくる。この日、ヤシヨクにお餅を供える。

15日の朝、オチャ・ゴハンを供え、10時頃、机の上の棚をかたづけ、この日の昼過ぎ川に線香を

持ってハスの葉に包んで送りに行く。新棚の家のホトケは墓へ参る。ローソクを灯して参る。ルスマイという。

15日は、石塔のところで施餓鬼をし、盆踊りもした。盆踊りは、16日のところもあり、江州音頭（サイモン）の踊りが主であった。

16日、ヤブイリである。

### 2 山辺三・戒場のサビラケ（田植始め）

打越千代さんにうかがった中に、サビラケの話が詳しくあった。田植え始めを、サビラケといって、この日、カヤ（ススキ）の葉を2本用意しておく。ゴハンをにぎり、キナコをかけて、ナエサンの上ののせて、庭の片隅で祀る。このキナコをかけたニギリの上に2本のカヤをのせて祀る。また、皿にゴハンを入れ、一升マスをゴハンにかぶせる。これを供える。

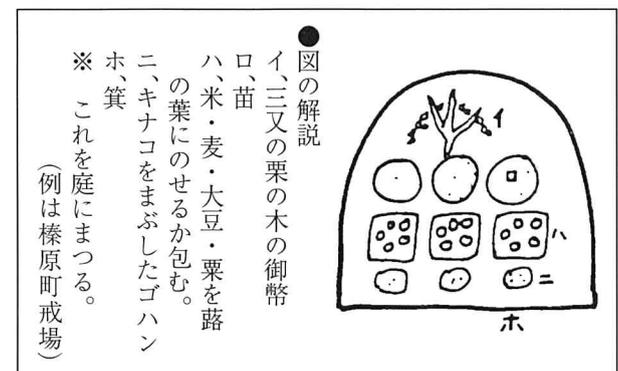
田植えをする娘さんは、これを食べると良い。また、カヤを腰にさすと田植えで腰をかがめても腰痛にならないという。

田植え終わりにノヤスミがあり、ハゲツショの小麦餅を作り、ホン休みが7月18日、宮さんや寺さんに、白い粉を持って行く。

同じく、戒場でたずねたサビラケのことを示す。話は、戸板美樹三氏（明治32年生）による。

サビラキ（田植え始め）5月22日か23日には、苗を3把持って帰り、ゴハンに大豆の粉をかけて（粉には砂糖と塩も入れる）、田へ持ってきて植えるところに供える。その時、箕の中へ苗を3把入れ、ゴハンに大豆の粉をまぶす。また、栗の木、三又の木を持って帰り、それに御幣をつけ、五穀（米 [洗米] ・小豆など）を路に包んでカヤに結びつけ、持って帰った苗を箕の中に入れ、ゴハンに豆の粉をかけて、庭にて祀る。

サナブリ（田植え終りのこと）・ノヤスミは、村人全部で休む。「あるき」という人が「サナブリ」ということを告げて回る。この日赤飯を炊いて祝う家が多い。



▲サビラケの供え物

# 普及講座「茶の民俗」実施して—博物館学芸員実習生の『日誌』から—

浦西 勉・徳田陽子

考古学、歴史学、民俗学の資料は日増しに増加し、その情報量が豊富になって来ています。資料が残存するという事は、その地域に、文化が存在している証です。これらの郷土資料を未来のために保存してゆくことは当然として、この資料を知的に活用してゆかなくてはならないと考えています。今日、郷土を学習するため、郷土資料に接したりする機会が増えてきています。そこに、民俗博物館の役割を自覚するのです。この普及講座ではなによりもまず、資料に接することからはじめ、教育者自身の見方、考え方を、広く深く養うことを目的としています。たった1日でどんなことが学べるのかと思われるかもしれませんが、なかなか印象深いものでした。第1回から数えて5回目になり、第1回目からそのテーマを書き上げると、次のとおりです。

第1回目 民俗資料の教材研究

第2回目 大和の夏のまつり

第3回目 山の民俗

第4回目 奈良盆地の農村から学ぶ

第5回目のテーマは、次にご紹介する平成11年7月30日に実施した「茶の民俗」でした。(1に実施要項とテーマを掲載いたします) 普及講座に参加された先生方も、何らかのものが役に立ったのではないかと考えています。さて、今回は、当日、講義の補助としてお手伝いしていただいた小林幸子さん(滋賀県立大学:博物館学芸員実習生)の『博物館実習報告』からの抜粋させていただき報告としました。主催する側と参加者との中間の立場で客観的に観察して下さった様子がよくうかがえると思ったからです。了解くださった滋賀県立大学の関係者と小林さんに感謝致します。

## 1 第5回民俗博物館普及講座「茶の民俗」

【要旨】

私達の住む地域の文化を知るために、民俗資料は大いに役立つはずですが、この普及講座では、民俗資料をどのようにすれば教育に役立つのかを、模索しています。

今回、「茶」をテーマにしました。日常生活において飲む「茶の風習」はもちろんですが、「大和の茶粥」や「奈良茶飯」など伝統的食文化。また、奈良には茶の湯の祖、村田珠光の存在。そして、産業としての「茶業」の発達など、「茶」に関して多くの資料(教材)が存在しています。当館には、茶の製造用具など具体的な資料があります。このような資料を通して郷土をいかに教えるか、を考える場にしたいと思っています。

【日時】平成11年7月30日(金) 10:00~16:30

【場所】奈良県立民俗博物館 講義室・公園

時間 演題 講師

- 10:00~12:00 茶から見た自然・環境教育  
香芝市立真美ヶ丘東小学校教諭 本庄 眞  
番茶・茶粥作り(見学) 鳥見 秀子
- 13:00~14:00 大和の茶業の歴史  
県農産普及課副主幹 寺田 孝重
- 14:00~15:00 教科書に出てくる茶の歴史  
県立斑鳩高等学校教諭 辻 俊和  
武田新太郎
- 15:00~16:30 奈良と茶の湯  
奈良教育大学名誉教授 木村 博一
- 主催 奈良県立民俗博物館  
後援 奈良県教育委員会

テーマ	大項目	中項目	小項目
茶	茶の木	茶の木について	世界の茶の呼称と系譜 茶の木の分布 ヤマチャの分布(日本)
		茶の科学	茶の成分
		番茶を作る	茶の製法 奈良県内の自家製茶・番茶を作る道具・世界の茶の製法
	茶粥を作る	奈良と茶粥・奈良茶飯 茶粥を作る道具	
茶業の成立	産業としての茶	日本の茶業・奈良の茶業 ・生産状況 茶業の今日	
茶の文化	日本の茶の歴史	日本の茶・喫茶の風習・年表	
	茶道の文化	茶人の系譜・茶筥・茶湯釜 ・茶道具・茶壺・茶室・茶掛 ・茶道の思想	
	世界から見た茶	『茶の本』(岡倉天心)	

## 2 小林幸子さんの『博物館実習日誌』より(滋賀県立大学人間文化学部)

7月30日(金)実習第4日

第5回奈良県立民俗博物館普及講座「茶の民俗—郷土をいかに教えるか—」の補助

10時~12時 茶から見た自然環境・環境教育

番茶・茶粥作り

講義室での館長の挨拶の後、茶畑まで歩き、茶畑で茶刈りばさみを使って茶摘みかごに茶葉を摘んでいく。

一番茶→八十八夜【5月2日(2月4日から数えて88日め)】の新芽

二番茶→7月頃に出る芽。

番茶は昨年からの番茶。

茶の木がカマボコ状であるのは一番育てやすく、たくさん茶が取れるため。しかし近年では茶の木は多くの肥料を必要とするため環境問題につながるという問題視されている。

旧岩本家のかまどで番茶をつくる。

沸騰した湯の入った釜にセイロを置き、その中に摘んだ茶葉を入れて蒸す。青ぐさみが消え、お茶の葉のにおいがしたら、むしろにあげ天日で乾



▲公園内の茶畑で茶刈りの体験

す。この時手でもんだり、量が多ければ足で踏んだりする。もむことによって葉に含まれるペクチンが出て粘り気が出るとともにお茶のいい香りがしてくる。番茶の作り方は地方によって様々な方法があり、茶葉をそのまま湯に入れたり、乾かしたりする方法もある。

釜に湯を沸かし、茶袋と呼ばれる木綿製でひもによって首の所を縛れる簡単な袋に茶葉を入れ、湯に入れる。茶が出たら洗った米を入れて炊く。米を入れる前に茶袋は取り出しておく。茶粥を食べる。お茶漬けのように食べやすいもので、奈良では朝御飯として食べられていたものである。番茶はふだん飲みなれたお茶とは違っており、少し甘い香りがし、懐かしい感じの味がするものだった。

休憩の後、午後からは講演が行われた。

13時～14時「大和の茶業の歴史」と題した、県農産普及課主幹 寺田孝重氏の講演を聞く。

茶の原産地についてやその移動に伴う変化、茶の性質によってさまざまな地域に広がりを見せたことや日本に伝来した経緯についての概要が説明された。

また茶の性質としては、あまり水がいらないので水田にできない土地で栽培され、あまり暖かくない、栽培には悪条件の限界地で作られたものには甘みうまみが出て良質の茶となることが解っている。

14時～15時 「教科書に出てくる茶の歴史」と題し、県立斑鳩高等学校教諭 辻俊和 武田新太郎両氏の講演がある。

日本史と世界史にわけ、高校の教科書に出てくる茶の記述を紹介しながら茶業の歴史についてを説明された。特に日本史においては古代・中世にはあまり具体的な記述はなく、室町になってから産業・文化の両面での記述がある。世界史においては宣教師が日本においての宣教活動の中で茶の湯を学んだり教会に茶室をおいたことなどから日本人と茶のつながりが強いことを示していること。チベット・モンゴル・ウイグルなど北方民族への伝播として、茶の交換がよく行われていたことが示されている。

10分間の休憩中に高知県に伝わる、わが国唯一の発酵茶である基石茶が出される。地元では飲用せず、茶粥に使われる。番茶よりも薄い色で、少し漢方薬のような匂いがある。味は後味が残り少し酸っぱいような味である。

15時10分～16時40分「奈良と茶の湯」について奈良教育大学名誉教授 木村博一氏の講演。

奈良を中心に、文化としての茶の歴史を追って

いく。特に茶業の広がりには大きな役割を持った律宗の本山、西大寺では現在も大茶盛といわれる行事が存在するが、その始まりといわれているのが鎮守八幡宮への献茶だといわれる。また奈良商人の子として生まれた村田珠光は、現在につながる茶の湯の確立を図り、四畳半の茶室や座敷飾りの簡素化を行った。

茶というキーワードを通して奈良と茶の深いつながりを感じることができる普及講座だった。

(中略)

普及講座の補助として自分自身も参加し、奈良県というものをより深く感じる事が出来た。茶粥を食べるのは初めてのことであったし、かまどを実際に使う事も始めてみるものだったので非常に興味深い事だった。今まで民俗博物館を見学したりして何となく見ていたものが、ちゃんと意味を持って使われているという事が驚きであり、お茶というものはとても手間のかかるものであると聞いていたこともあって一家で飲むお茶を自給自足していたということ、またお茶と奈良が密接な関係を持っていることも知らなかったことだったのでとても勉強になったと感じている。わたしは講座の補助として記録係を担当し、カメラを持って進行を記録していった。シャッターチャンスに間に合わなかったり、慌てて撮ったり、取材に来ていたテレビのカメラに阻まれたりと大変だったが、カメラ係ということで進行の一番近くで見ることができたのは幸運だった。

(写真：小林幸子さん撮影)



▲カマドで茶粥を炊き壺杓子ですくう

## 平成12年度 平成12年 4月～9月 行事予定表

<p>～7/9(日) 収蔵品展 「くらし絵と昔の用具 -遊ぶ・楽しむ・学ぶ-」 故・辻本忠夫氏のスケッチ画に描かれた娯楽・遊戯などの情景と当館所蔵の〈遊ぶ〉〈楽しむ〉〈学ぶ〉用具から、大正期・昭和期(前半)の状況を紹介します。</p> <p>講座・講演など ◆4/22(土) Pm 2:00～ ワークショップ「収蔵品展・展示解説」 解説：奥野 義雄(当館学芸課長) ◆5/28(日) Pm 1:30～ 博物館講座 「消えゆく昔の遊び・楽しみとその用具」 講師：奈良文化女子短期大学講師 原 泰根氏 募集定員：50名(一人一枚往復葉書で申し込み) ◆6/10(土) Pm 2:00～ ワークショップ「漁撈と漁具」 解説：浦西 勉(当館主任学芸員)</p>	<p>7/29(土)～9/24(日) 特別展 「奈良晒-近世南都を支えた布-」 奈良晒は商品用麻織物の第一級品として全国的にその名を知られ、近世の奈良の町を支えた重要な産業であった。 本展示では、奈良晒の歴史、伝承技術ほか奈良晒をめぐる人々の生活文化の一端を紹介する。</p>
--	--

- ◆8/6(日) Am10:00～  
体験学習「麻糸をつくろう」  
講師：澤田絹子氏  
募集定員：30名(一人一枚往復葉書で申し込み)
- ◆8/23(木) Am10:00～Pm 4:00  
普及講座「教材研究-郷土をいかに教えるか」＝講義と実習＝  
募集定員：30名(一人一枚往復葉書で申し込み)  
※小中高校教諭・公民館等指導員対象の講座
- ◆9/9(土) Pm 2:00～  
ワークショップ「特別展・展示解説」  
解説：横山浩子(当館主任学芸員)
- ◆9/17(日) Pm 1:30～  
特別展開連  
特別講演会  
講師：奈良教育大学名誉教授 木村 博一氏  
募集定員：60名(一人一枚往復葉書で申し込み)

開館時間	9:00～17:00(民家は16:00) (入館は16:30まで)
観覧料	大人200円 学生150円 小人70円
休館日	毎週月曜日(休日の時は翌日)
年始年末	(12月28日～1月4日)